

二〇一九年 安居次講

撰大乘論第十章彼果智分の考究

宮下晴輝

開講の辞

このたび、二〇一九年度の安居次講を拜命することになり、無著の『撰大乘論』を講読考究することにいたしました。

真諦の『婆藪槃頭法師伝』によれば、インド西北のプルシャプラ、いまのペシャワールに、ヴァスバンドウという名の三人兄弟の長子として生まれましたとあります。説一切有部にて出家し、小乗の空觀を学んだが、意を安んずることができず、神通によって兜率天にいき弥勒菩薩をたずねて、その弥勒より大乘の空觀を学び、閻浮提に帰って教えのとおりに思索しついに悟りを得ます。そしてこれは大乘の空觀によつたのであるから、アサンガ、無著と名のることにした、と伝えていきます。

この伝説には、無著の思想の基本が「大乘の空觀」にあるということが端的に語られています。そしてこれは、パラマルタ、真諦三蔵の伝承であるということ、すなわち玄奘門下による法相唯識が興隆する以前の伝承者によるものであります。

近代仏教学の初期に、このようなことについて注意をうながしたのは、大谷大学第三代学長佐々木

月樵でありました。佐々木月樵は、『撰大乘論』の研究に付された論文において、無著の『金剛般若論』に閑説して、「吾人は無著の瑜伽教学は、至るところ常に般若教学に裏づけられつつあることを知る。したがってまた、無著伝中に彼が大乗の空観に入りしというその大乗の空観の拠るところをも推定するところの内的史料となる」と言っています。

その佐々木月樵の『漢訳四本対照 撰大乘論』が、後に近代仏教学研究の第一人者となる山口益によるチベット語訳を付して公刊されたのが、一九三一年のことであります。一九二七年一月末日の渡欧直前に記された山口の「はしがき」には、佐々木月樵の「撰大乘論の対訳研究」が始まったのは、一九二三年以前からであったこと、チベット語訳本論の研究による結果をその都度佐々木月樵に報告していたことが記されています。しかし、一九二四年四月に佐々木月樵は発病し、やがて回復するも、一九二六年三月に示寂されたのであります。

その後、山口の渡欧ということもあって、佐々木月樵の遺作が、『漢訳四本対照 撰大乘論』として出版されたのは、一九三一年であります。そこには、上篇として、「無著の撰大乘論とその学派」という論文が付されています。この論文には、無著の撰大乘論を、どのように読み、研究すべきであるかが、「伝紀と教学」「正依の經典」「正依の論書」「対訳研究」などを通して論じられ、最後には、地論学派と撰論学派の伝承とその教義にいたるまでが論じられています。先に引いた『金剛般若論』

の言及も、この論文にあるものです。実に該博なる知見をもって分析整理し、無著の思想に精確に迫ろうとする真摯な情熱が伝わってきます。

またほぼ時を同じくして、宇井伯寿の撰大乘論の研究が一九二七年から始まり、その成果が一九三五年に『撰大乘論研究』として出版されています。すでに一九二四年に、論文「史的人物としての弥勒及び無著の著述」が出版され、唯識思想への研究関心はそのころにあったことがうかがえます。

宇井の『撰大乘論研究』は、真諦訳の『撰大乘論』を中心にした研究であります。その冒頭には、佐々木の漢訳四本対照の研究に触れ、その上篇の論文第一章には、宇井の論文に述べたことが「あるいはほとんどそのまま採用せられている」と記しています。

また他方、一九二一年に木村泰賢の『原始仏教思想論』が出版されています。それに対する批判論文として、一九二五年一月に、宇井伯寿の「十二因縁の解釈―縁起説の意義」と、また同年同月に赤沼智善の「十二因縁の伝統的解釈について」が出され、一九二七年には「原始仏教における縁起説の開展」と題する木村の再批判が出ています。宇井伯寿の撰大乘論の研究が始められたのは、いうところの縁起説をめぐる論争がはじまった最中でもあったのです。

宇井伯寿の仏教研究の真剣さが、いくぶん論争的なものを醸し出すのかもしれない。ここでは、佐々木月樵と宇井伯寿という、近代仏教学の二人の巨頭が、問題関心を同じくして『撰大乘論』の研

究を始めたことは、記念すべきことであると受けとめることにしたいと思います。

さて『撰大乘論』の研究は、山口益のすすめもあって、長尾雅人に引き継がれました。それは一九三九年の春からであったと、長尾は述懐しています。そしてその成果が『撰大乘論 和訳と注解』として、その上巻が一九八二年に、下巻が一九八七年に出版されました。

こうして、今日にまでいたる、近代仏教学における撰大乘論研究をふりかえってみると、佐々木月樵の四本対照の研究出版から九〇年近く、また長尾の研究成果出版から二十年あまりが経ったこととなります。しかしこれは、いずれもいまだ百年にも満たない、つい近年のあるいは最近の研究成果であり、今日もなお研究が継続されているものと考えべきものであります。

また実際に『撰大乘論』の研究に取りかかったものであるならば誰しもが、長尾雅人の『撰大乘論 和訳と注解』という研究成果にまでいたった研究の継続があつてはじめて、我われもまたその研究に参加することができるのだという思いをもつにちがいません。

このたびの安居次講の講読考究において、この『撰大乘論』をとりあげることができたのは、まさしくいま述べた研究成果の恩恵の賜であります。それにしても、いかにもそれを一歩たりともいまだ超え出ることができていないことを告白しておかなければなりません。しかも、『撰大乘論』の最終章の「彼果智分」は、大乘仏教の極みであるともいうことができるであります。それを講題とし

て掲げたこと自体、まことに不遜で遺憾であります。そしてその結果を先取して告白すれば、そこに到達する以前の状況と言わざるを得ません。

『撰大乘論』は、その思想の基礎を『瑜伽師地論』の「菩薩地」に据えていることは明らかです。その「菩薩地」の功德品の冒頭には、“*bohisattvasya anuttare samyak-sambodhi-yāne śikṣamānasya*” すなわち「無上正覺乘を学んでゐる菩薩」という言葉が出てきます。これは、大乘とは無上正覺乘であるという、まったく新たな宣言であります。この「無上正覺乘」という一点に大乘の一切を包摂する、すなわち撰大乘するということが語られているのでありましょう。

このようなことを念頭において、『撰大乘論』が課題にしたことをあらためて確認し、『撰大乘論』において論じられていく唯識思想の始まりとその目標を確かめつつ、もしも力が及ぶならば、法身思想の展開と三種の仏身論にまで考究を進めたいと念願するものであります。講義の大半は、論本の講読に終始することになります。聴衆の方々には、講者の念願とするところを慮ってください、ともに学びを進めていただきますことを念じております。

二〇一九年七月一七日

宮下 晴輝

目次

開講の辞

第一章 撰大乘論序章から見た論の目的…………… 1

第一節 「撰大乘」という主題…………… 1

第一項 『菩薩地』開始の言葉…………… 2

第二項 『菩薩地』を結ぶ言葉…………… 4

第三項 『菩薩地』功德品の撰大乘…………… 8

第四項 『大乘莊嚴經論』功德品の撰大乘…………… 10

第二節 大乘の殊勝性を明らかにするという主題…………… 11

第三節 十殊勝の概要…………… 18

第一項	十の殊勝性の一々が表わすもの……………	18
第二項	十の殊勝性と仏語の意味……………	21
第三項	十殊勝の順序と目的……………	24
第四項	境行果という組織……………	29
第五項	十殊勝の組織の背景……………	32
第二章	撰大乘論の主要な課題とその背景……………	37
第一節	大乘が仏語であるということ―大乘への問い……………	37
第一項	『大乘莊嚴經論』第一章第七偈―大乘が仏語である八つの理由……………	39
第二項	『大乘莊嚴經論』第一章第十一偈―仏語の定義をめぐって……………	46
第三項	『撰大乘論』世親釈による仏語の定義への言及……………	55
第四項	仏語の定義と結集の問題……………	60
第五項	『撰大乘論』が仏語とするもの……………	64

第二節	唯識思想―仏教の新たな思想表現	69
第一項	『菩薩地』 真実義品における八分別	71
第二項	『菩薩地』 真実義品における四尋思・四如実遍智	78
第三項	『撰大乘論』 第三章における唯識への悟入	82
第三節	法身思想の展開	91
第一項	阿含経などに見られる法身の語	92
第二項	般若経に見られる法身の語	100
第三項	解深密経に見られる法身の語	106
第四節	三仏身説について	113
第一項	『入楞伽経』の三仏身説	113
第二項	『中辺分別論』に見られる三仏身説	115
第五節	『莊嚴経論』に見られる三仏身説	118

第一項	清淨法界（『莊嚴經論』9_56-59）	118
第二項	諸仏の三つの身体（『莊嚴經論』9_60-66）	125
第三項	四種の仏智（『莊嚴經論』9_67-76）	139
第三章	撰大乘論第十章彼果智分の講読考究	146
第一節	三種の仏身	146
第一項	智の殊勝性と仏身	148
第二項	自性身の意味（1）——自性——	150
第三項	自性身の意味（2）——自在——	151
第四項	受用身という語について	154
第五項	變化身が表わすもの	156
第二節	法身の十義	156
第一項	法身の五相	158

第二項	法身の証得……………	163
第三項	法身の五種の自在……………	164
第四項	法身は三つの依りどころになること……………	166
第五項	法身を掌握する六つの仏の徳性……………	168
第六項	法身の区別……………	170
第七項	法身の二十一徳……………	171
第八項	法身の十二の甚深……………	185
第九項	法身の七種の憶念……………	195
第十項	法身の五つの救済のはたらき……………	199
第三節	清浄仏土の相……………	202
第四節	その他の諸問題……………	206
第一項	一乗について……………	206
第二項	仏の同時的多数……………	207

第三項	非入般涅槃非不入般涅槃	208
第四項	三身相互の関係	210
第五項	法身無量と求道	218
第六項	『撰大乘論』尾題	219
結びにかえて		221

凡 例

一 撰大乘論のチベット語訳は、Peking edition No. 5549, Li 1-51a; Derge edition No. 4048, Ri 1-43a6 を用いた (Peking edition の該当場所は pLi 43a4b1 の下に、Derge edition は dRi 37a3-b7 のように表わした)。

二 撰大乘論の章節番号は、長尾雅人『撰大乘論 和訳と注解』上(一九八二)、下(一九八七)にしたがった(これを「長尾訳」と表わした)。その略号として MSG (*Mahāvāsanāgraha* の略)を用いた。例えば、MSG 10.1 は、撰大乘論の第十章第一節を表わす。

撰大乘論のテキスト及び諸漢訳についての詳細は、長尾雅人『撰大乘論 和訳と注解』上の四八頁以下にあるので、参照されたい。以下に諸漢訳を翻訳年とともに挙げておく。

- 1 『撰大乘論』阿僧伽作、仏陀扇多訳(五三一年訳)
- 2 『撰大乘論』無著菩薩造、真諦訳(五六三年訳)
- 3 『撰大乘論釈』世親菩薩積、真諦訳(五六七年訳)
- 4 『撰大乘論釈論』世親菩薩造、達磨笈多・行矩等訳(六〇五〜六一六年訳)
- 5 『撰大乘論本』無著菩薩造、玄奘訳(六四八年訳)
- 6 『撰大乘論釈』世親菩薩造、玄奘訳(六四八年訳)
- 7 『撰大乘論釈』無性菩薩造、玄奘訳(六四七年訳)

漢訳は、大正新脩大藏経に収められているものを用いた(「大正蔵」と表わした)。

『撰大乘論』や世親の注釈、無性の注釈のチベット語訳、あるいは、それらの漢訳についての該当個所の一覧対照表が、勝呂信静・下川邊季由校訂『新国訳大藏経 瑜伽・唯識部 11』(二〇〇七、四五二頁から四六五頁)に「漢訳・チベット語訳及び註釈書類の対応表」として載せられている。

三 その他用いた主なるテキスト。

(一) 『菩薩地』

Bodhisattvabhūmi, edited by Urai Wogihara, 1936. (荻原本と表わす場合もある。)

Bodhisattvabhūmi, edited by Nalinaksha Dutt, 1966. (Dutt あるいは Dutt 本と表わす場合もある。)

(二) 『解深密経』

『解深密経』のテキストは、『瑜伽師地論』撰決拵分中菩薩地にあるものを用いた。チベット語訳の該当場所は、Peking edition と Derge edition をそれぞれ、pHi 100b5; dZi 90b7 のように示した。

(三) 『大乘莊嚴経論』

Mahāvānasūtrāṅkārā-bhāṣya, par Sylvain Lévi, 1907. (偈頌は MSA 及び世親の註釈は MSABh と略記。例えば MSA 9_56 は、大乘莊嚴経論の第九章第五十六偈を表わす。)

長尾雅人『大乘莊嚴経論』和訳と註解―長尾雅人研究ノート―(1)―(4) (2007・2014) の pdf 版を参照することができた。長尾訳『莊嚴経論』(1)などと略記。

(四) パーリ語テキストはすべて Pali Text Society 版 (PTS と略記) を用いた。

四

翻訳（チベット語、パリー語、サンスクリット語、漢訳書き下しなど）は、特に断わらない限り、すべて筆者自身によるものである。参考のために、「長尾訳」などとして相当箇所を示している。

第一章 撰大乘論序章から見た論の目的

第一節 「撰大乘」という主題

この『撰大乘論』は、先行する諸の瑜伽行派のテキストにもとづいてまとめられたものであるが、その中でも特に『解深密経』『瑜伽師地論』『大乘莊嚴経論』などが、直接の背景になっていると言える。そしてそれらの中にすでに「撰大乘」という主題が説かれているのである。『撰大乘論』という論題がここに新たに設けられたのではなかった。

この点については、すでに高崎直道が適切にまとめているので、*それにしたがって、いくぶん補いながら見ておくことにしよう。

注* 高崎直道「瑜伽行派の形成」(『講座大乘仏教 8 唯識思想』一九八二所収)のなかの第四節にあたる「撰大乘」

瑜伽行派の立場 (一)「」。

第一項 『菩薩地』開始の言葉

『瑜伽師地論』菩薩地（以下『菩薩地』）の冒頭はつぎのようにはじまっている。

これらの十法が、果をともなつた菩薩道である大乘を包摂するのである (saphalasya bodhisattva-mārgasya mahāyānasya saṅgrahāya samvartante)。十とは何か。持 (ādhāra) と、相 (linga) と、分 (pakṣa) と、増上意樂 (adhyāsaya) と、住 (vihāra) と、生 (upapatti) と、摂受 (parigraha) と、地 (bhūmi) と、行 (caryā) と、建立 (pratiśhā) とである。

(*Bodhisattvabhūmi*, Dutt ed. p.1, 1-3; 荻原本欠)

十法有りて具さに大乘なる菩薩道と及び果とを撰す。何等をか十と為す。一には持、二には相、三には分、四には増上意樂、五には住、六には生、七には摂受、八には地、九には行、十には建立なり。

(『瑜伽師地論』大正蔵 vol. 30, 478b15-18)

ここに挙げられている十項目の最初の「持」(ādhāra) は、『菩薩地』の初めの十八章を指す。それは、

1. 種姓品、
2. 発心品、
3. 自利他品、
4. 真実義品、
5. 威力品、
6. 成熟品、
7. 菩提品、

8. 力種姓品、9. 施品、10. 戒品、11. 忍品、12. 精進品、13. 静慮品、14. 慧品、15. 撰事品、16. 供養親近無量品、17. 菩提分品、18. 功德品である。そしてそれに続いて、十項目の「相」(ling) 以下、すなわち菩薩相品、分品、増上意樂品、住品、生品、撰受品、地品、行品、建立品という順序で、『菩薩地』二十七章全体が組織されていくことになる。

したがって、『菩薩地』の冒頭にまず、その全体の組織が十項目をもって提示され、そのことによって「果をともなつた菩薩道である大乘を包摂する」のだと言っているのである。

ここに「果をともなう」と言うのは、菩薩道の道果である「無上正等菩提」(anuttara-samyak-sambodhi) を証する (abhisambudhyate 現等覺、現証、証得) ことである (Dutt ed. p.1, 9-10)。それが菩薩道の究極の目的であることは、処々にうかがえるところである。そしてそのような道果をともなう菩薩道が大乘と言われるのである*。

それ故、その大乘を包摂すること、すなわち「撰大乘」という主題のもとに、この『菩薩地』という論が組織されているということがまずその冒頭に語られているといえよう。

注* 「開講の辞」で引いた「菩薩地」の功德品冒頭の「無上正覺、乘を学んでる菩薩」(bodhisatvasya anuttare samyak-sambodhi-jāne śikṣamāṇasya) という言葉は、まさしく大乘の菩薩道の目的が、無上正覺を証することにあることを示すものである (Bodhisattvabhūmi, Dutt ed. p.193, 4-5; Wogihara ed. p.285, 4-5; 大正蔵 vol.30, 3)

545b27)。また「無上正覺」(阿耨多羅三藐三菩提)という表現がどういう意味をもっているかという点については、拙稿「仏土に生まれる仏道」(『真宗教学研究』第三九号、二〇一八、一〇〇頁)を参照のこと。

第二項 『菩薩地』を結ぶ言葉

『菩薩地』の最後の章である建立品 (*pratiṣṭhā-pāṭala*) は、つぎのように結ばれて終っている。

このようにして、この菩薩たちの学道 (*sikṣā-mārga*) は成就し、学道の果 (*sikṣā-mārga-phala*) が説き明かされた。「この学道の果は」すべての菩薩の学道とすべての種類の学道の果を解説するための依りどころである。実にこの『菩薩地』(*Bodhisattva-bhūmi*) は、「菩薩蔵の論母」(*bodhisattva-piṭaka-mūlaka*) とも言われ、「大乘の包摂」(*mahāyāna-saṃgraha* 撰大乘) とも言われ、「壊滅の路と壊滅しない路の開示」(*pranāśāpranāśa-patha-vivarana* 開示壊不壊路) とも言われ、「清浄な無障智の根本」(*anāvāraṇa-jñāna-viśuddhi-mūla* 無障智浄根本) とも言われる。

天であれ人であれ、沙門であれ婆羅門であれ、天人を含む世間のなかの誰かが、この『菩薩地』に対して、堅い勝解を生じて、これを聞き、受持し、記憶し、修習に専念し、他のものたち

のために詳細に解説し、ついには、書き記して保持し、供養恭敬につとめるとしよう。その者にとっては、要約して言えば、一切の菩薩蔵の中に含まれている経を聞くなどの業をなした福德の集積が、世尊によって、説かれ、広められ、開かれ、表わされ、明らかにされると同じだけの、それだけの福德の集積が、彼に期待されるのである。

それはなぜか。なぜならば、この『菩薩地』に、すべての菩薩蔵の標拳と解釈の諸門が包摂され、明らかにされているからである。そしてこの『菩薩地』に詳細に開示されているその法と律とが、解明と読誦と法随法行とによって、長時に留まり増長広大する限り、像似の正法(saddharma-pratīpaka)は、正法が消滅するほどに多くはならないであろう。しかしまた、像似の正法が増大する限りは、その者にとって、真実義に結びついた正法は、隠滅するであろう。

以上が、『菩薩地』における持究竟瑜伽処(ādāre nīṣṭhe yoga-sihāne)の第六建立品(saṣṭham pratisūṭhā-pāṭalam)である。
(Bodhisattvabhūmi, Dutt p.282.8-25; Wogihara pp.409.11-410.11)

是の如く一切菩薩の学道と及び学道の果を円満し顕示するを菩薩地と名づく。具さに一切の菩薩の学道と及び学道の果の一切種を説き教えるに実の依処なるが故なり。又た此の菩薩地を、亦た菩薩蔵摩怛理迦と名づけ、亦た撰大乘と名づけ、亦た開示壞不壞路と名づけ、亦た無障智淨根